

特集Ⅱ：現代の学校と教師の仕事
学びのフォームとスキルの育成を取り入れた
「学び方学習」の指導
—各種テキストの開発と活用—

関 根 均

(埼玉県立春日部東高等学校教頭)

The Current Trend of the School and the Teacher's Work in Japan ;
The Instruction of 'Learning How to Learn' ;
Development and Plactical Use of Textbooks

SEKINE HITOSHI

(Vice-principal of Kasukabe-higashi High School,Saitama Prefecture)

要 旨

私はこれまで「学びのフォーム・スキル」の開発と育成のための実践を行ってきた。本論はこれまで取り組んできた「学び方学習」の指導や各種テキストの概要を示すとともに、今後の課題について考察したものである。今後の課題は「管理職としての実践」「学びを中心とした教育活動の総合化・構造化」「小・中・高・大の連携」と考える。生涯学習を見据えたとき、「学びのフォーム・スキル」の育成は学校教育における重要課題である。

1 はじめに

本稿では、私がこれまで取り組んできた「学び方学習」の指導について整理し、今後の課題について考察したい。なお、「学びのフォーム」とは「型、態度、姿勢、在り方・生き方」、「学びのスキル」とは「技能、テクニク」として区分して考えている。

私が子どもたちの学びと学び方指導に関心をもった源泉は、上越教育大学大学院に派遣された時の教育学研究、県立不動岡高校での「倫理」の教科指導と小論文指導、県教育局指導主事時代の経験、そして、県立幸手高校

時代に取り組んだ「つまずき問題」にある。指導主事時代には埼玉県における現行学習指導要領改訂に関わり、また、「県立高校学力向上総合推進事業」を立ち上げて実施し、年間100校を超える学校訪問を行った。県立高校における多くの教育実践を渉猟し、また、進学校から学習指導困難校の各教室にも入っていった。幸手高校時代は、小学校の学習内容も十分に理解できていない生徒がいかにして学習につまずくのかを知るために、市内の小・中学校を訪問・調査した。こうした経験から「子どもたちが学びを確実に獲得する方法」の開発が急務だと考えたのである。

なお、「学びのフォームやスキル」の開発に当たっては、自らの授業実践や参観・見聞した教育実践が根底にあるが、斎藤孝氏や陰山英男氏の実践や著作、田村秀行氏や樋口裕一氏の小論文に係る著書、出口汪氏の現代文参考書等から多くを学んでいる。また、大学時以降学び続けてきた教育学の諸論、そして、私が倫理の教員であることから、心理学・社会学・哲学等の知見も援用している。

2 「学びのサプリ」の取組

(1) 「学びのサプリ」とは何か

「学びのサプリ」とは、大学受験勉強に向け、「偏差値を10P上げる」ことを目標として、学習法のみならず人間の総合力を高めるノウハウを教授する朝補習である。平成17年度は約100名、平成18年度は約160名、平成19年度は約35名が参加している。毎回「サプリ・シート」なるものを直接提出させて、生徒とのコミュニケーションを取るようになっている。同時に、単なる補習に留まらず、サプリ受講生を核とした「サプリ式学習法」の伝播と学びの仲間づくりも意図してきた。また、多くの先生方も聴講し、本校における授業改善の機運を醸成する役割を果たした。サプリには学校改善に向けての一つの運動という位置付けが含意されている。

(2) 『天才の学習法』の作成

『天才の学習法』は「学びのサプリ」のテキストである。その第1版は、今から11年前に県立不動岡高校で教諭として勤務していた時に「小論文指導」や「倫理」の授業での取組を基に作成したものである。平成17年度に現任校に教頭として赴任し、「学びのサプリ」を開始するに当たって改訂し、平成18年度と平成19年度にさらなる改訂を行い、現在の『天才の学習法Ⅲ』に至っている。

この学習法は人間としての総合力の上に、「一般学習力」と「教科学習力」からなる基礎学力が培われ、その上に受験学力を育成す

るという考え方に基づいており、「志、生活、身体、感覚・感性、言葉」を鍛えることを第一に行い、その上で、様々な学習スキルや勉強法などを教えるという構成になっている。単なる受験ノウハウではないが、多くの生徒が成績を伸ばしており、また、志望校へ多数合格しているので効果はあると判断できよう。このような学習指導の在り方は今後さらに研究開発されるべきだと考える。

次頁に構成を示すが、本校のホームページ(<http://www.kasukabehigashi-h.spec.ed.jp>)

に「第16章 蛇足論：サプリ的素人国語」を除く全文を掲載してあるので、参照願いたい。

〈『天才の学習法Ⅲ』の構成〉

第一部 「生きる構え」編

- 第1章 学力とは人間力である
- 第2章 「天才」という哲学
- 第3章 やる気を出す方法
- 第4章 生活が頭脳を明晰にする
- 第5章 身体が明晰な頭脳を支える
- 第6章 感覚感性が頭脳を明晰にする

第二部 「学びの構え」編

- 第7章 学びの哲学
- 第8章 文武一体の「部活動練習法」
- 第9章 サプリ式授業の受け方
- 第10章 サプリ式学習法

- 1 自己暗示法 2 目的化法
- 3 ○△×法 4 想起法
- 5 全体構造法

- 第11章 サプリ式「問題の解き方」
- 第12章 サプリ式「学びのスキル」

- 1 思考のフォーム：5つの呪文
- 2 メモをとる技術 3 読む技術
- 4 考える技術 5 暗記する技術
- 6 集中する技術

第三部 言葉力編

- 第13章 基礎論：言葉文章に関する蘊蓄
- 第14章 実践論：段落で「読む」「書く」
- 第15章 小論文論：小論文は私を鍛える

第16章 蛇足論：サプリ的素人国語

第四部 面接編

第17章 面接の哲学

第18章 面接の準備・訓練

第19章 面接の仕方

最終章 なぜ天才になるのか、天才になっ
てどうするのか

特色・ポイントのいくつかを示したい。

- 「やる気」を哲学的・実践的に考察したこと (第3章)
- 文武一体の理論化と実践方法を示したこと (第7・8章)
- 教授や自学に加え「学び合い」の効果に着目したこと(第7章)
- 「問題を解くという行為」に着目したこと (第11章)
- 言葉力 (国語力)を重視し、その育成法を示したこと (第三部)
- 面接を生き方・表現力指導に位置付け、そのノウハウをまとめたこと (第四部)

その他、「想起法」「もぎとり読み」「なるほど読み」などの具体的スキルを示している。中でも「問題を解くという行為」に着目したことは、我ながら慧眼だと自惚れている。これは平成19年度の改訂で新たに加えたものだが、良くも悪くも子どもたちの学習にはテストがついて回る。しかし、テスト自体、つまり、子どもたちはどのように問題を解くのか、問題を解くことは教育的にいかなる意味や効果を持っているのかについて十分に考えてこなかったのではないだろうか。単純なテスト批判・受験批判は、子どもの学びを理解していないと私は考えている。

(3) 『東高式』の開発と実施

『東高式』はA4版10頁の小冊子で、『天才の学習法』のエキスをまとめたものである。現2・3年生については昨年学年集会で示し、現1年生については入学に際して説明している。これも本校のホームページに掲載してあ

るので詳しくはそちらをご覧ください。

- 1 東高式「授業の受け方」
- 2 東高式「家庭学習の仕方」
- 3 東高式「定期考査勉強の仕方」
- 4 東高式「テストの受け方」
- 5 東高式「学習法」
自己暗示法、目的化法、○△×法
想起法
- 6 東高式「学びのスキル (技法)」
 - (1)「理解」の技法
 - (2)「メモ」の技法
 - (3)「もぎ取り読み」の技法
 - (4)「読解」の技法
- 7 東高式「文武両道」のススメ
 - (1)「朝勉」のススメ
 - (2)「端切れ時間活用」のススメ
 - (3)「頭脳を支える体作り」のススメ
 - (4)部活動のススメ

中でも「東高式授業の受け方」は、教員の授業改善の取組と連動するものである。教員自身がこの授業の受け方を意識して授業をしなければ効果はない。逆に、生徒がこの授業の受け方を実行すれば教員は授業の質を高めるために授業改善をしなければならなくなる。教員の授業の仕方に枠をはめることを懸念する向きもあったが、この方法はあくまで基本ベースである。各教科の特性を踏まえ、各教員の工夫をその上加えればよりよい授業が創造されるはずである。少なくとも、生徒の授業への集中力は高まり、授業もやりやすくなる。『東高式』に合わせて、『東高式教員用解説』を作成し、さらに、研修会を実施した。このような取組は、小学校ではそれほど珍しい取組ではあるまい。しかし、高等学校の実践については寡聞にして知らない。

東高式「授業の受け方」

- 1 元気に起立で「頑張りましょう」

テンションを高めて、やる気満々で授業に臨みましょう。

2 本時のねらい、各自の目標の確認

3 授業中のモットー

(1) メモをとる。言葉をもぎ取る。(受け身で聞かない。)

(2) 先生の指示にすばやく対応する。(授業で遅れないコツ、理解を深めるコツです)

(3) 分かったら頷く、分からなかったら首をかしげる。(反応せよ) 反応は、自己点検・自己評価です。分かることと分からないことを自ら確認します。教員にとっても生徒の反応は効果的な授業を行う上で必要です。

(4) 資料は加工する。(三色ボールペンを使う、メモを加える。浪費読みをするな) 同じ読むなら、何かを得ようとして資料を読みます。何となく読むのは時間の無駄です。資料は汚してよいのです。自分の読んだ跡をつけると頭に入ります。

4 授業理解の確認 想起法30秒

授業で勉強したことを想起こすだけです。授業が終わったあと30秒目を閉じて何を学んだか、思い出しましょう。思い出したことは忘れません。

5 授業の自己評価 5秒

分かったか、分からなかったか。分からなかったところはどこか。たった5秒です。勉強というものは、分からないところを分かるようにするだけのことです。

さて、「先生の指示にすばやく対応する」は小学校の授業参観から学んだものである。授業を注意深くみると、教員の指示に自力で素早く反応できる児童は6割程度で、他の児童は他の児童の動きを見たり、また、直接尋

ねたりして反応している。1割程度の児童は反応せずに過ぎてしまう。つまり、授業に参加していないのである。これは「学習のつまずき」の原因の一つとなっている。

『東高式』の取組はまだ徹底したものとはなっていない。学年集会での呼びかけ程度に終わっているからである。各教員がその意図するところを理解し、日々の授業で有機的に取り入れてこそ意味ある実践として結果が出てこよう。

しかし、成果は少しずつだが確実に出ている。生徒の学習に関する実態調査によれば、「授業中板書以外にメモを取る生徒」は87.3%に達している。昨年度の比較では、朝勉(早く学校に来て勉強すること)を毎日または多くの日に実施している生徒は19.1%から34.8%に、端切れ時間を活用して勉強している生徒は37.9%から49.3%へと確実に増えている。これらの生徒の変化を模擬テストや大学進学の実績に結びつけていくことが今後の課題である。

4 各種テキストの開発

本校では『東高式』の開発・策定と同時平行して、平成18年度、総合的な学習の時間の改訂と人文科課題研究の改善に取り組んだ。その一環として『総学のしおり(1学年用)』と『人文科研究ノートⅠ・Ⅱ』というテキストを作成し、本年度当初から活用している。

(1) 『総学のしおり(1学年用)』

この資料は3月に行われる入学許可候補者説明会で配布し、その中に掲載されている『東高式』を生徒に伝えている。併せて、後述する「育てる生徒募集」と連動させている。

目次を示したい。

第1部 新たに東高生になった諸君へ

1 春日部東高校の目指す教育：『文武両道・全人教育』

2 入学までに身に付けておきたいこと

第2部 生きる構え

1 春日部東高校の「生活指導」：礼儀
・マナーの育成

2 春日部東高校の「部活動」

3 家庭で育てる「生きる構え」

第3部 学びの構え：「東高式」

第4部 言葉力の育成

1 書く力の育成

2 書く技術 (基礎編)

3 「言葉力」の育成

第5部 各教科の学習法

第6部 進路の探求 (総学テキスト)

1 進路学習の内容と方法

2 「総合的な学習の時間」の学習計画

第7部 先輩からのメッセージ

第6部が「総学のテキスト」であるが、その前段として「生きる構え」と「学びの構え」を示している。「構え」とは「フォームとスキル」のことである。

生きる構えとして「正しい座り方」「正しいスキル歩き方」「顔つきの整え方」「お辞儀の仕方」を示している。また、家庭では「家事を行うこと」を求めている。

また、高校での学習の基礎基本を言葉力 (国語力) と捉え、『天才の学習法』の言葉力編の一部をテキスト化している。多くのシートを書かせ、書く力の育成も目指している。

(2) 『人文科研究ノートⅠ・Ⅱ』

本校では埼玉県唯一の人文科を平成6年に開設しているが、開設当初から1年生では「課題研究トレーニング」として3000字程度の論文を、2年生では「課題研究」として7500字程度の論文を作成させている。

今回の改訂に当たっては、次に示す「人文科で育てる7つの力」を身に付けさせるとともに、大学で研究するために必要なスキルを育成することを目標とし、学習過程のどの場面でどの力を育てるかを明確にした。

〈人文科で育てる7つの力〉

- ①社会への関心
- ②知的好奇心 (興味・関心、探求心等)
- ③課題設定力・課題解決力
- ④情報収集力 (読解力、読書力、IT活用力)
- ⑤思考力 (理解力、論理力、洞察力等)
- ⑥情報活用力
- ⑦発信力 (表現力、発表能力)

改訂に伴い、総合的な学習の時間や課外学習「キャリア・ガイダンス」で実施してきた「課題研究」を学校設定科目「人文科研究Ⅰ・Ⅱ」として教育課程上に位置付け、単位認定することにした。すでに県教育委員会からも許可され、平成20年度から設置されることになっている。『人文科研究ノートⅠ・Ⅱ』はそのテキストとなる。

「人文科研究」のねらいと到達目標は以下のとおりである。

〈人文科研究のねらい〉

- ①社会、特に人文的領域に関する知見を深め、興味・関心を持つ。
- ②読書・調査活動等を通してテーマを深く考察するとともに情報収集力や情報活用力を高める。
- ③原則として毎回シートを書き、「書く力」や「思考力」をさらに向上させる。
- ④論文作成を通じて、言葉力、思考力等、総合的な学力の向上を図る。
- ⑤上級学校で研究を行うためのスキルを身に付ける。
- ⑥高校生の研究なので厳密性・形式だけでなく独創性も大切にする。

〈人文科研究の到達目標〉

- ①具体的に設定した課題に対して適切な仮説を立て、実証研究により仮説を検証できる。
- ②自分の研究の限界や課題を自己認識することができる。
- ③研究のレベル及び学び取ったノウハウやスキルは、大学2年生終了程度を目標とする。このねらいと到達目標を踏まえ、次のよう

な改善点によりテキストを編纂した。

〈指導のポイント〉

- 研究の指導段階を明確にしたこと
単に論文作成を目標とするのではなく「テーマの設定段階」「研究段階」「論文作成段階」「発表段階」の4段階とし、必要な力やスキルを育成することとした。
- 研究の方法を明確にしたこと
「テーマ設定→課題設定→仮説の設定→仮説の検証」の手順で研究させ、研究の基礎を身に付けさせることをねらった。
- テーマと課題設定を区別したこと
これまでは、例えば「アメリカの国際戦略について」のように具体的に何を明らかにするのが明確になっていないことから、研究方法や資料収集について焦点化できるように「なぜブッシュ大統領は対イラク政策を変更させたのか」と疑問文で設定させることにした。
- 各シートを毎時書くようにし、「書く力」を付けるとともに、その都度論文の部品を作成するようにしたこと
シートにも工夫を加えている。何を書くことが求められているのかを明確にし、感想に留まらずに思考させるような問いを研究中である。
- 体験的・実証的研究を求めたこと
これまでの課題研究は、ややもすれば参考文献の切り貼りになる傾向があった。これでは小学校の調べ学習と大差はない。インターネットで安直に論文を作成する生徒も出現した。そこで、フィールドワーク、実験、観察、調査（聞き取り調査、アンケート調査等）、見学、実習などの体験的・実証的研究を必ず取り入れることとした。高校生に厳密な実証研究は無理なので体験活動なども含めた次第である。自分で考えること、行動（作業）すること、オリジナリティを追求することが目標であるから、文献研究であっても、用いられる用語の頻度

調べ、表現のリストアップ、資料からの図表作成等も幅広く認めている。

- 生徒の学び合いの場面を取り入れたこと
これまでも中間発表でクラスメートへのアドバイスを実施してきたが、課題設定におけるペア・ワークでのアドバイス、相互批評、第1次原稿の相互添削などを取り入れた。人文学の集団の力による学習効果を期待するとともに、人文学生としての意識を高めることもねらいとしている。
- 文献の引用や著作権についての学習を充実させたこと
大学で卒業論文を書く時に必要な基本事項を学べるようにしている。

〈課題研究の指導過程〉

段階	研究の手順
テーマ設定段階	1 課題研究トレーニングの成果と課題を自己評価する 2 自分の進路と結びつけながらテーマを探す
	1 限定的・具体的に課題設定する 2 独創性のある課題を考える
研究段階	1 文献を調べる 2 インターネットで検索する 3 体験的・実証的研究をする
	1 仮説を意識して課題設定する 2 仮説を立てる 3 仮説を検証する（実証的に研究する） 4 結論を出す
論文作成段階	1 「書く心構え」を身に付ける 2 論の構成を考える 3 段落の論理展開を構築する 4 実証的、論理的に書く 5 事実と意見を峻別して書く 5 文章を推敲する
発表段階	1 明確に伝える 2 ホームページを作成する
	1 自己評価・相互評価を行う

5 これからの課題

(1) 管理職としての実践

学校評価や人事評価など学校の組織的運営が推進されている中で、学校教育の根幹である授業（教授）の組織的運営が最重要課題となる。これまで、特に高等学校においては、授業は一般の教員（教諭）が行うものであり、管理職が立ち入るものではないという、暗黙の合意事項というものが根強かった。『東高式』に見られるように、学校としての学習メソッドを開発し、各教員の教えるスキルを高めるためには、管理職の授業への関与が不可欠である。また、人事評価を実質的に行う動きの中で、管理職による授業参観が実施されることになっている。

このような状況の中、今後、管理職の教育活動の実践力や実践への指導力が求められるよう。今管理職には学校の経営者という面が強調されているが、教育の専門家としての面が再び浮上してくるに違いない。両者を兼ね合わせる必要があるのは言うまでもないが、現場感覚、実践感覚、皮膚感覚を忘れてはなるまい。教職員や子どもが見えなければ「正しい学校経営」はできない。教育管理職の力量は、教育活動に関する力量の上に築かれなければならないからである。

私は昨年度から授業参観の観点を作成して教職員に示し、本年度は自ら「倫理」の授業を担当し、開発した授業方法を公開している。また、生徒と一緒に授業を受けるという授業参観の方法を実験している。

授業に参加するために教科書や教材を予め入手し、予習も行う。まだ10名程度の授業しか受けていないが、学ぶとはどういうことか、教えるとはどういうことか。かなりリアルにいろいろなことが見えてくる。

次のような意義があると考える。

- 本校生徒の授業中の状況を知る
- 本校生の学習上の課題を発見する
- 本校の教員の授業実践を発掘する

○「学ぶ」とはどういうことか、分かるということかを知る

○「教える」とはどういうことかを知る

○管理職による授業参観の在り方を考える

○高校教育の在り方について考える

○大学入試対策を考える

○生徒の立場に立って授業や教育を考えることを身に付ける

まだ取組を開始したばかりであるが、今後システム化することが課題である。授業参加から得た知見をいかに教職員にフィードバックするか、個人的な経験をいかに共有し、学校運営につなげていくか。教育を本質的に考える材料になるだろう。

(2) 学びを中心とした教育活動の総合化・構造化

学びのフォームやスキルは、授業だけでなく様々な場面で育てられるものである。そこで「学びを中心とした教育活動の総合化・構造化」が課題となろう。教育活動の総合化・構造化とは「学校の教育活動全体で生徒を育成するために、あらゆる教育活動を有機的に関連付けて教育活動の効果を高めること」であると考えている。

本校は「文武両道」を校訓とし、授業に加え部活動、生活指導、学校行事などにより人間を総合的に育成する「全人教育」を目標としている。その点で、教育活動の総合化・構造化が特に求められる学校である。そこで、本校の将来構想の方針を定めた上で、平成18年度に「春日部東高校ランド・デザイン」を策定した。このランド・デザインは今流行しているビジュアル化された学校構想絵図ではなく、生徒に伸ばす力を「7カテゴリー24の力」に整理し、その力を教育活動のどの場面で育てるかを示した青写真、つまり、「学校の教育活動全体のシラバス」ともいべきものである。これにより、各教員が各場面で行っている教育活動は統合化され、教員も自分の行っていることがどのように位置付

けられるかを知ることができる。

なお、この24の力は「どのような場面で生徒に対してどのような力を育てようとしているか」を全職員に対して調査し、それを整理して措定したものである。

〈Ⅰ 現実に関わる力〉

- 1 現実把握力 2 社会への関心
- 3 課題設定力・課題解決力
- 4 判断力・決断力
- 5 行動力・実行力・挑 戦力

〈Ⅱ 人間関係を築く力〉

- 6 他人を配慮する力
- 7 コミュニケーション力

〈Ⅲ 社会人として必要な力・態度〉

- 8 礼儀・マナー 9 人間力
- 10 気概・奉仕の心 11 異文化理解力

〈Ⅳ 自己を確立する力・発揮する力〉

- 12 自立力 13 忍耐力(継続力、自制心等)
- 14 自己実現力

〈Ⅴ 考える力、学ぶ力〉

- 15 知的好奇心 16 基礎学力
- 17 思考力 18 集中力
- 19 情報収集力 20 教養

〈Ⅵ 創り出す力〉

- 21 情報活用力 22 発信力

〈Ⅶ 健全な心身〉

- 23 体力・気力 24 健康

(3) 小・中・高・大の連携

学びは高校だけで育成するものではない。子どもたちが一生の中で培い、磨きをかけていくものである。その意味で、「学びのフォーム・スキル」の育成には小学校・中学校・高校・大学の連携が不可欠である。特に、受験対策として効率的に学習成果の上がる方法、つまり、「ごまかし勉強」が広まっている昨今、最重要課題である。

〈小学校との連携〉

地元の小学校から『東高式』を参考に小学

校の学習メソッドを作成したいとの話があり、本校を会場として小学校の研修会を実施した。その際に小学校の先生方に本校の授業を参観していただいた。今後は、本校の教員が小学校の授業参観をしたり、出前授業をするなどの交流が考えられる。

〈中学校との連携〉

本校では昨年度から「育てる生徒募集」という取組をしている。これは、中学時代に学ぶべき基礎基本、生きる構え、学びの構えを育てて高校受験を乗り越えさせ、高校でさらに大きく成長する生徒を育てようとする生徒募集の方法である。入試を単なる選抜として捉えるのではなく、生徒を伸ばす重要な教育活動としても捉える画期的な生徒募集の方法だと自負している。具体的には中学校時代に身に付けるべきことを明示するとともに、中学生版『東高式』の作成・配布、中学生向け学習講座の実施等の諸企画を行っている。

〈大学との連携〉

『人文科研究ノートⅠ・Ⅱ』による指導に見られるように、本校では大学へ合格させるだけではなく、大学教育へとつなげる教育活動を実施している。大学教授を課題研究の講師として講義をお願いするだけでなく、直接指導をしていただいている生徒もいる。教養教育の見直し・再評価が求められる今、『論文作成ノート』の共同開発なども高校・大学ともに益のある企画ではないだろうか。

〈一環プログラムづくりに向けて〉

「小・中・高・大の一貫した学びのフォーム・スキルづくりプログラム」の必要性を強く感じる。本年度、本校は小学校長、中学校長、大学教授、市教育長を学校評議員にお願いした。学校評議員の会議を活用してその青写真を描いてみたいと考えている。各学校段階が他の学校段階に何を望むか、自分の学校段階の役割は何か。このように「学びのフォーム・スキル」の育成は「開かれた教育実践づくり」の取組でもある。